

子規全集

第十七卷

俳諧研究

子規全集 第十七卷

俳諧研究

定價 參千八百圓

昭和五十一年二月十八日 第一刷發行

著者 正岡子規

編者 正岡忠三郎

發行者 野間省一

發行所 株式會社講談社

東京都文京區音羽二―一二―二一

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

郵便番號 一一二 振替 東京三九三〇

印刷所 株式會社精興社

製本所 大製株式會社

本文用紙 三菱製紙株式會社

©正岡忠三郎 一九七六年

落丁本・亂丁本はお取りかえいたしません

N. D. C. 910 840p 20 cm

俳諧研究

目次

蕪村句集講義	冬之部		五
蕪村句集講義	春之部		一七
蕪村句集講義	夏之部		三五
蕪村句集講義	秋之部		五三
參考資料			七三
蕪村句初句索引			七九
解題	長谷川孝士		七九
解説	北住敏夫		八三

編注

本卷には「俳諧研究」として「蕪村句集講義」を収録した。

「蕪村句集講義」は明治三十一年一月に始められ、子規没後の明治三十六年四月、第六十三回で終わった輪講の記録である。その間、五年四か月の長期に及んでいる。子規を中心として、鳴雪・碧梧桐・虚子らが蕪村句をめぐって研鑽玩味し討論しあった記録は、その都度「ホトトギス」誌に連載されたが、のち若干手を入れて「冬之部」「春之部」「夏之部」「秋之部」の順に單行本として刊行された。

本卷には、その單行本を底本として刊行順に収めたが、初出年月日も分るよう、各項末尾に注記した。初出表示に附した☆印は、初出を底本としていないことを示す。

輪講の對象とされた蕪村句は、底本では、たとえば「みのむしの得たりかしこし初時雨」のように、○印が傍記されているが、本卷では讀者が見易いように、句の頭に◎の印を附して、○印を省いた。

また、初出「ホトトギス」誌にあったことば（文）で單行本では削られているものうち重要と思われるものについては、たとえば「然も微妙を極め織工を缺かず」（七頁）のように、本文中に「」でかこんでこれを示した。

蕪村句集講義 冬之部

ほととぎす發行所

明治三十三年五月十五日刊

凡例〔冬之部〕

〔編注〕これは底本の凡例である。蕪村句は原本に従うとあるが、原本と校合して異なる所は原本通りとし、必要な注を句の下に記した。

一、本書は鳴雪、子規、碧梧桐、虛子、露月等、明治卅一年一月より卅二年二月に至る間、根岸子規の草廬に會し、蕪村句集冬之部を輪講し、筆記し、雜誌ほとゝぎすに連載したるものを輯めて一冊と爲したるなり。

一、(八)迄は伊豫國松山にて發行せしほとゝぎすに載せし分なり。

一、(八)迄の文中往々松山語につき云々せし處あるは松山にて發行せしほとゝぎすに載せたる故なり。

一、筆記せし人と時とによりて文章體裁を異にし精粗一ならず。そは總て舊に依りて改めず。

一、圈點を附したるは蕪村句集の句又は其前書なり。

一、蕪村句集の句及其前書の漢字、假名、送り假名等は總て原本に従ふ。

一、先づ冬之部を出版したるは先づ冬之部の輪講を終りたればなり。春之部、夏之部、秋之部も輪講を終りたれば出版すべく、其出版の順序も輪講を終る順序に従ふべし。

燕村句集講義 冬之部

(一)

碧梧桐記

古人の名句を読むは迦陵頻伽かりようびんがの聲を聞くが如し。正法念經に曰く山を曠野と名づく其中多く迦陵頻伽あり妙音聲を出す是の如き美音若くは天若くは人緊那羅きんなら等能く及ぶものなしと。誠に其聲琅々として珠玉を撲うちつが如く心耳共に清み俗塵を拭ふに堪へたり。

古人の名句を読むは菩薩の天冠を見るが如し。天冠に五百の寶華あり一々の寶華に五百の寶臺あり一々臺中十方諸佛淨妙國土廣長の相を現すと。衆として淨光を湛たたへ爛として衆目を奪ふ。「然も微妙を極め織工を缺かず」天冠の名ある所以、萬衆の仰ぐ所以。後世尙ほ其赫灼たる光明を失ふことなけん。

古人の名句を読むは茯苓ぶくりやうを嚼かむが如し。茯苓の醫藥に於ける用五あり。小便を利し腠理そうりを開き津液を生じ虚熱を除き瀉を止む是れなり。誰か俳句の小便利を病み腠理を塞ふさぎ津液を缺ぎ虚熱を増し瀉を患ふるものぞ。茯苓五錢を服用せば立たちどころに其邪氣を去らんかな。

古人の名句を読むは檳榔を飲むが如し。檳榔の功たる能く腑中の物を消磨するにあり。不消不磨はこれ萬病の本源にして不起の大患も概ね是に基く。然も隠れたる邪氣を去り又た疎利の大功を奏す。嶺南の瘴氣を除くは其特徴として見るべきなり。

頃來子規子を始め同人相會して古人の句の輪講を催す。必ずしも迦陵頻伽の聲を聞き、菩薩の天冠を觀、茯苓を嚼み、檳榔を飲みしとはいはず、唯だ其暢達縱横の作を品し、其經營慘憺の痕を觀、以て自ら鑑み、思想の停滯と言詞の澁晦とを醫せんとするのみ。抑も古人の句の評釋を試みたる者其人少しとせず、七部集の講義と言ひ、芭蕉の句解といひ、近世に到るまで其數擧ぐるに遑あらず。其他元祿の句を論し天明の句を議する其著無きに非ずと雖も、然れども其解釋論議の方向を失し本旨を愆りたるを如何せん。其字句に拘泥するの餘作者が思料せざりし古事引例に附會し其事實を詮索するの弊遂に作者の思想をも破壊するに到るもの往々にして然らずといふことなし。蓼太の芭蕉句解を見て芭蕉地下に首肯すべきか、乙二の蕪村句解を以て蕪村地下に首肯すべきか、殊に七部集大鏡等の如き美の講究を忘れて理窟の論議に涉りたるもの、予等の慊焉たらざりしや久し。蓋輪講會の起りし一因なりとす。古事古書の引例を以て誤れりといふに非ず。其引例を求めざるべからざるは固より論なし。唯だ徒に古例を求めて己が博學を衒ひ遂に句の曲解を爲すものを憎む。予等は其弊習を矯めんとす。字句に拘泥する必しも用なきに非ず。然れども徒に語法句格を言ひ古語俗言を爭ふ、墨繩を以て物を量るが如きを憎む。予等は其偏見に倣はざらんことを期す。誰か迦陵頻伽の妙音を以て銅鑼の蠻音に比したる。誰か菩薩の天冠を以て麻羅の戴冠に較したる。古人の罪は問

ふべからず。予等は唯だ茯苓を嚼んで彼山に遊び、檳榔を飲んで此心を洗ふのみ。他あらんや。一月十五日初會を根岸の獺祭書屋に開く。會者主人と共に虚子、碧梧桐の三人に過ぎざりしと雖も、論難夜更けて盡きず口角沫を飛ばすの概ありき。今其要を摘録して聊か同好の人に示す。疎鹵放漫何ぞ烏鷺の嘲なしとせんや。唯だ大方の教誨を待つのみ。燕村の冬の句より始めたるは時冬なりしを以てなり。

◎ みのむしの得たりかしこし初時雨

蓑蟲は若葉の出づる頃、老葉に棲み絲を吐きて巢を作るものにて、梅の枝其他に能く下りたるを見る。その得たりかしこしといふは作者の主觀にて、木葉は凋落し萬物時雨に濡るゝを詫ぶる頃なるに、獨り蓑蟲のみは身に皮を着たれば時雨降るとも怖るゝに足らじと得意顔なるさまを言ひしものなるべし。作者の洒落なり。蓑蟲の蓑の字、芭蕉が猿も小蓑をといひしにちなみて、景情共に添ふの感あり。深邃なる意あるに非ず。

◎ 初しくれ眉に烏帽子の雫哉

〔編注 烏帽子↓烏帽子の誤り〕

濡れたる烏帽子の雫眉に落つるさまにして、常人の思ひ及ばざる所を見つけたたりといふべし。子規君曰く、斯句によりて如何なる場處と如何なる人物を想像するやと。虚子君曰く、白丁宮守などの年老いたるが庭の掃除などしてありしに時雨のふり來たりたる場合眼前に浮むと。子規君曰く、予はさる卑しき身分のものとは思はず。神主などの烏帽子も立烏帽子といふものにや、高く大きやかなるものを着たる心地せり。濡るゝべき位置に居らぬ者が偶然濡れたる場合なるべし。虚子君曰く、

然らず常に濡るべき地位に立ち居るものを用ゐて始めて「初」といふ字の響く心地すなり。兎に角此句の面白き點は初時雨に烏帽子の雫眉に垂れたりといふ其事實のみにして、其他はいふの違なきものか。子規君曰、其點は可なれども不完全の句たることは免れざるなり。余後に按ずるに作者自身の場合にては無きか。然れども其場所は到底不明に屬す。蕪村の手腕を以てして尙多少の工夫なかりしか。

子規附けていふ、鳴雪翁いふ、此句の烏帽子の主は昔の五位六位々の官人の類なるべしと。是れ普通の連想ならん。余の神主と思ひしは明治の實景より起りし考なり。又眉は黒きか白きかと問ひしに兩方の答ありき。固よりどちらとも分らねど、官人と見る人は黒き眉を連想し、仕丁と見る人は白き眉を連想するが普通なるべし。

◎ 楠の根を靜にぬらす時雨哉

楠といへば先づ社の境内などを想像すべし。楠の根といふは楠の根もとの所をいふなるべし。四邊に人影もなく寂然として神さびたる宮のたゞ雨の音のみ物淋しく聞えたる景を顯したるにや。靜に濡らすといふは作者の主觀にして、其擬人法なる所多少の厭味あるが如くなれども、楠の立てる其根幹のしとくと濡れたる有様も思ひ出でられて自ら寂寥たる感を起すなり。或は曰ふ、態と根といひ濡らすといふこと後世天保時代の句の如き感ありと。蓋し天保時代の句が斯る摸倣によりて邪路に陥りたるものなるべし。此の句は夕暮近き感ふかし。

子規附けていふ、鳴雪翁は楠の根の外に露れて蹣^{わたかま}り居る體なりといはるれど、碧虛二子は根は外

に露れずといふ。余も寧ろ後者の感に同じ。根が蹠り居ては「静かに濡らす」といふ静かさに副はぬ心地す。

◎時雨るゝや蓑買ふ人のまことより

この句は定家卿の

いづはりのなき世なりけり神無月誰がまことよりしぐれそめけん

といへる歌を翻案したるものなるべし。此歌は時雨時を知るの意をよめりとなん。此句は最早時雨の頃にもなりたれば蓑など用意せではと蓑を買ひたりしに、丁度其誠にいづはりもなく時雨の降りしといふ意なるべく、蓑は蓑蟲のと同じ芭蕉の句より思ひつきたるものなるべし。句法の面白き句なり。此句には時間の聯想を起すこと少し。

◎しくるゝや鼠のわたる琴の上

此句は鼠といふより夜の景たるはいふまでもなし。時雨降りやまではや夜も更けぬる頃、人目を忍びて出でし鼠の、そこ／＼に琴の上を渡りたる静けき夜のさまなり。琴の上とのみ言ひては琴の形状更に判然せず。或は立てかけてあるか、置いてあるか、又は袋に收めあるか、然らざるかは知るに由なし。また渡るといふ詞も厳しく詮索せば十分に解しかぬる詞なり。去れどもそれらは讀む者の感ずるに任じ、唯だ「鼠の渡る琴の上」といふに言ふべからざる美趣の存ずることを知れば可なり。又た其感得し趣味の如何に時雨と景致の添ふものなるかを知れば可なり。他を言ふの用なし。燕村の時雨の句中第一に推すべきものなり。

子規附けていふ、此句の主意は鼠が琴の上をわたりてチリン／＼といふ音と時雨の音との配合に在るなり。鼠が琴をわたる景色にはあらず。

◎ 古傘の婆娑と月夜の時雨哉

婆娑^{ばさ}とは漢語。物の動く形容にして竹の影などの動く場合に屢使用せらる。この句にも古傘の影をいへり。古傘には破れ傘の意もあるべし。月夜の時雨とは、月明く彼方に見ゆるに、此方は時雨る景にて、雲のきれ／＼なる夜など能く遭遇することあり。月といふも見えがくれになり、時雨といふも降り止むこと定めなき夜なり。ある夜の時雨に古傘^{こかさ}さして歩^あ行き居たるに、今迄見えざりし月の遽^{にわか}に雲間を漏れて傘の上にさしつるが、尙ほ雨はやまで其傘の影の足下に婆娑と動きたる刹那の景色なるべし。傘といふものゝ聯想より、婆娑といふ字義よりも字音の調和殊に面白し。作者は古傘をさして行く人なり。これ亦た琴の上の句に劣らぬものなるべし。

子規附けていふ、「婆娑」とはきはどき形容にして、月俄に雲を出で傘の影忽ち動く景色なるべく、従つて月は明かなる月にしてぼんやりしたる月にあらず。

◎ しくるゝや我も古人の夜に似たる

古人といふは宗祇の「世にふるは更にしくれのやとりかな」と詠せしを、後に芭蕉が「世にふるは更に宗祇のやとりかな」と追想して吟じたる事どもいへるにや。他意なき句なり。此句は普通の文法よりいへば「似たり」とあるべき處なれども、俳句としては「似たる」とあらざるべからず。蓋し「り」といひては唯そのみに止まりて外に聯想を及ぼすべき餘地なければなり。俳句の必ずし

も文法に關せざる一例と見るべし。

◎ 夕時雨 暮 ひ そ み 音 に 愁 ふ 哉

暮は秋寒くなる頃土中に潜みて翌年の夏回るを待つこと人の知る所なり。暮といふものゝ形狀より其ひそみ音に愁ふといふこと、假令作者の理想なりとも、また夕時雨の感に適せずといはんや。其理想は他人の企及すべからざる所なり。

子規附けていふ、此説明未だ盡さず。余思ふに、暮ひそみ音に愁ふといふは全くの主觀的にあらず。夕時雨しよぼ／＼と降る古庭の隅に「キュー」といふやうな音を聞きつけて、暮のひそみ音に鳴きしかと思へるなるべし。ひそみ音は竊かに鳴く音なり。

人〇〇〇高尾の山〇〇〇ふ〇〇〇し〇〇〇て〇〇〇枝〇〇〇の〇〇〇丹〇〇〇楓〇〇〇を〇〇〇贈〇〇〇
れり〇〇〇頃〇〇〇は〇〇〇神〇〇〇無〇〇〇月〇〇〇十〇〇〇日〇〇〇ま〇〇〇り〇〇〇老〇〇〇葉〇〇〇霜〇〇〇に〇〇〇堪〇〇〇え〇〇〇す〇〇〇
や〇〇〇か〇〇〇て〇〇〇は〇〇〇ら〇〇〇く〇〇〇と〇〇〇打〇〇〇ち〇〇〇り〇〇〇た〇〇〇る〇〇〇こ〇〇〇と〇〇〇に〇〇〇あ〇〇〇は〇〇〇
れ〇〇〇ふ〇〇〇か〇〇〇し〇〇〇

◎ 炉に焼てけふりを握る紅葉哉

人／＼は「太祇」几董などのことにや。紅葉の一枝を贈られしに十月十日過ぎのことゝて、霜深き頃なれば、其紅葉しばらくも得堪へず、皆々間もなく散り盡きたること、今しばらくと思ふにいかひなく哀れなりといふ意なるべし。されば其句も、たゞ其散りたる紅葉を惜みて爐に焚きながら烟を握るといふこと、其烟までも惜しみて握りたる心にて、單に惜むにも我はふりたるさまなく淡

泊なる句なり。此句には時の聯想なし。紅葉は秋の季なれども前書によりて冬季にはさみたるものなり。

子規附けていふ、前書のみにて冬季なるに非ず。爐は冬季なり。

◎ 初冬や日和になりし京はつれ

雨の降りさうなる日、又は降りたる日にてもよし、京をぬけて其町はつれ迄行きしに、雨も晴れ雲も散じてうらゝかなる日和となりし景なり。初冬といふは冬の初めにて空の澄み渡りたる、されども氣の冷やゝかなる感なれば、(この初冬の感に差異あり。虚子君は陰晴定まらぬ時雨に近き感といひ、其他多少の差異あれども、今はしばらく子規君の説に従ふ。時雨も十月、小春も十月、季の上にて多少の撞着無きにあらねども、實際は十月の日晴れたること多きものなり、天長節に雨の降ること少しといふも、丁度晩秋初冬の頃は日和の多きを證するものたれば、初冬は小春に近き感とするかた正當ならん)今迄町中を來て急に野に出でたる眼を拭ふか如き情に適したりといふべし。蕪村は京都に住みたれば斯ることは屢逢^{しばしば}ひたりけん。

◎ 居眠りて我にかくれん冬こもり

汚れたる浮世の我を忘れて暫く清淨の界に遊ばんといふ心なるべし。我を客觀に見るが故に我にかくれんと言ふ。居眠るは假寐にして膝など抱えたる佗人のさまをも想像すべく、冬籠の情を得たり。芭蕉が金屏の松の古びや、と詠せしは其客觀にして、この句は則ち其主觀なるべし。この句も時の聯想少き句なり。